

求められる総合型地域スポーツクラブ 神奈川県内総合型地域スポーツクラブのクラブ理念やその目的を参考にして

○吉原 さちえ（東海大学）、西野 仁（東海大学）

はじめに

総合型地域スポーツクラブの創設に向けた取組みは、『2010年までに全国の各市町村において少なくとも一つは総合型地域スポーツクラブを育成すること』、このスローガンを2000年に掲げてから、今年で7年目を迎えた。全国で2,000以上のクラブが創設されたものの、未設置市町村は今なお存在する。神奈川県では、33市町村のうち約半数の市町村が未設置状況である。現在、文部科学省委託事業の総合型地域スポーツクラブ育成推進事業は、(財)日本体育協会を主体に進められている。しかし、その実態は縮小傾向にあると聞く。例えば、指定クラブ(総合型地域スポーツクラブの設立を目指す団体など)への委託金額からもそれを窺い知ることができる。委託金は、初年度から徐々に減額され、今年度は、当初の1/3の額(1クラブにつき最高100万円の委託金)になった。この状況を踏まえると、総合型地域スポーツクラブ育成推進事業が、頭打ちの状態になりつつあると言っても過言ではない。

クラブ育成アドバイザーをしていた2005年4月～2007年3月の2年間に、当時の指定クラブの関係者から委託金の使い道に対する意見や要望を聞いた。具体的には、使用制限がありすぎて、『思うように使うことができない』、『使いたい時に使用することができない』『クラブの実情に合わない』などである。もちろん、クラブの設立に向けた課題は、これだけではない。地域内での総合型地域スポーツクラブに対する意識・認識の低さ、スタッフ間の温度差、適当な人材不足、活動場所の問題など、その内容は、多岐にわたっていた。また、昨年の学会大会で発表した総合型地域スポーツクラブの運営の実態¹⁾で明らかにしたように、クラブ創設後も、課題は山積みである。

このようにクラブの設立、そして創設後の運営は、一筋縄ではいかない。それらを知りつつも、なぜ自分たちの地域に総合型地域スポーツクラブを必要とし、その設立や運営に地域住民たちは、自ら積極的に取り組むのであろうか。彼らを後押しするものは一体何なのだろうか。

本研究は、2年間のクラブ育成アドバイザー時代に実施したクラブ訪問時のキーパーソンや中心スタッフへのインタビューの記録やそれぞれのクラブの理念やその設立目的を参考にして、地域社会の中で総合型地域スポーツクラブをどのような存在にしたいと考えているのかを明らかにしようとするものである。

研究の目的

神奈川県内にある総合型地域スポーツクラブが、地域社会において、どのような存在であって欲しいと願い、その活動に取り組んでいるのかを明らかにすることである。

研究の方法

- 1) 神奈川県内総合型地域スポーツクラブを訪問した際のインタビューの記録
2005年4月～2007年3月
- 2) (財)神奈川県体育協会 平成17年度神奈川県育成指定クラブ概要
- 3) (財)神奈川県体育協会 平成18年度神奈川県内育成指定クラブ活動報告書 総合型地域スポー

ツクラブの創設を目指す継続クラブの活動について

4) 総合型地域スポーツクラブオリジナルパンフレットとホームページ

これらをもとにして、研究を進めることにした。

結果及び考察

1) 神奈川県内総合型地域スポーツクラブを訪問した際のインタビューの記録から

イ メ ジ	歌声喫茶、青少年団、はやし連、祭り			
	スポーツも文化も、遊び中心、競技的でなく、アマチュア的、レクリエーション、伝承遊び、競技性と楽しみ			
	好きなことには自分たちでお金を出し合うのが当たり前、実技指導だけではない、できる限り低料金で			
	地域社会		個人	
場 に つ い て	大人の居場所づくり 子どもの居場所づくり 子どもの受け皿	周りの環境 商店街とのかかわり	人と人との付き合いの場 コミュニケーションの場 たまり場 社交の場 交流の場	様々な体験活動の場 自ら楽しむ場 学習の場 憩いの場
人 に つ い て	子ども 大人 高齢者 高齢化 少子化	大人の目 地域の人々の連携 世代間交流	顔見知りを増やしたい ふれあい 人付き合い スマートな付き合い 垣根づくり	健康・体力づくり 引きこもりの解決に 自由なときにふらっと 義務化ではなく 気軽に できる人ができることをできる範囲で 色々なことができる
そ の 他	町づくり 町おこし	防犯	地域貢献 社会貢献 地域コミュニティの形成	地域資源の活用 地域の特性を活かす 地域の楽しみ

総合型地域スポーツクラブの「イメージ」は、「歌声喫茶」、「青少年団」、「はやし連」、「祭り」という言葉から想像すると、賑やかな活動の場であり、親から子へ、孫へと続く、世代継承を読み取ることができそうだ。また、競技志向的なスポーツから、アルフィ・コーン²⁾が『スポーツには、そのほかの気晴らしとおなじように、楽しみを提供するほかはおそらくなんの存在理由もない。』と述べているように、楽しみや純粋性を求めるスポーツへ移行している傾向が伺える。

「地域社会」の視点では、場所については、「居場所」づくりや「周りの環境」との関わりを、人については、「子ども」・「大人」・「高齢者」のすべての世代を挙げていることから、それぞれの年齢層にとって、居やすい場所づくりを目指していると考えられる。

「個人」の視点では、場所については、「コミュニケーション」、「交流」、「様々な体験活動」、「憩い」が、人については、「付き合い」、「垣根づくり」、「気軽に」という言葉があげられ、自由な状態の中で、人とのつながりを大切にしていることが読み取れる。また、「できる人ができることをできる範囲で」、この言葉からは、スポーツだけを行うことだけでなく、総合型地域スポーツクラブに対して積極的に関わろうとする姿勢が感じられる。

2) (財) 神奈川県体育協会 平成 17 年度神奈川県育成指定クラブ概要と

平成 18 年度神奈川県内指定クラブ活動報告書から

テーマ	
スポーツが育むひと・まち・未来	体を動かすことの楽しさを体感できる機会の提供
スポーツに親しむ機会の提供	純粹にスポーツを楽しむ場としてのスポーツ環境
スポーツと文化の融合	「やって、見て、参加して」楽しめる生涯スポーツの提案
スポーツ・文化ライフ創造のためのクラブ	地域の全住民がスポーツに親しめるクラブ
スポーツを通じて人づくり、仲間づくり	身近な場所で気軽に参加できるスポーツクラブ
人と人との「ふれあい」の復活	豊かなスポーツライフ環境の提供
和みの場、話題づくり、コミュニケーションづくり	ライフワークの一部になるようなスポーツクラブ
地域コミュニティの場としてのクラブ	
スポーツコミュニケーションを通じた豊かな地域社会と発展に	
文化・スポーツを愉しみ、コミュニケーションがとれるサロンのようなクラブ	

キーワード	将来像		目的
生きる喜びをわが町に	地域の教育力向上	子どもたちの健全育成	人づくり
スポーツで地域を元気に	地域の活性化	子どもの体力低下防止	仲間づくり
4つの葉のクラブづくり	地域コミュニティの拡大	青少年の健全育成	心豊かな人間づくり
悠・飛翔	地域コミュニティの醸成	青少年の非行・犯罪防止	健康づくり
スポーツを楽しむ	地域コミュニティの活性化	高齢者の健康保持	健康・体力づくり
仲間を大切にす	世代間交流	高齢者の体力向上	心と体の健康づくり
文化・歴史を学ぶ	コミュニケーションの輪	地域住民の心身の活性化	青少年の居場所づくり
子どもと大人がともに成長		地域住民の心身の健全化	家庭づくり
クラブが人生そのもの		生活習慣病の改善	町づくり
自立・協働・愉会		豊かな人間性の教育	
		競技志向からの脱却	

テーマには、「スポーツ」、「文化」、「コミュニケーション」、「ライフ」、「楽しさ」、「純粹さ」、「豊かさ」、「サロン」、「ふれあい」「和み」などの語句が見受けられる。キーワードには、「生きる喜び」、「地域を元気に」、「クラブが人生そのもの」、「自立・協働・愉会」などオリジナルの言葉が印象的である。将来像には、「地域」、「子ども・青少年・高齢者」に代表される「人」に関わる用語が多い。そのような中で「競技志向からの脱却」という言葉に興味を引かれる。目的は、「人」、「健康」、「町」という語句が目立つ。

3) 総合型地域スポーツクラブオリジナルパンフレットとホームページから

『そもそもスポーツの語源は *disport* であり「遊び、興ずる」という意味だといわれたことがあります。ですから私たちはスポーツの原点を「遊び」と考えています。したがってクラブの活動においては、一切の強制はありません。…… 一人一人の善意によって作り上げてゆくクラブこそ、地域に密着し長続きするものだと信じています。』(NPO 法人 K クラブ)

『カヌーを中心としたアウトドアスポーツを通じて、技術の取得と技能の向上に努めるとともに、環境保護等に関する活動も行い、生涯スポーツの普及及び環境との共生の実現に寄与すること」を目的に……』(NPO 法人 KOS クラブ)

『この活動を経験した子どもたちには、大きくなり、どんなスポーツと出会っても、そのスポーツを

楽しめる力と、すべを身につけてくれていると願います。この活動を経験した親たちは、ちょっとしたことでも、近くの子どもに声をかけてあげられるようになっていくと思います。……、今の社会に薄れていく昔からの良いものを、探しつづけ、もっともっと大きく広がった活動に育てていきたいと思っています。』(YJ)

「スポーツ（の原点）は遊びである」、だから「強制するものはない」と断言しているクラブに見取れるように、総合型地域スポーツクラブの中には、ホイジンガ³⁾が記す『スポーツの本質』をわきまえた上で、活動を実施しているところもある。また、環境の問題、古きよき時代の日本の文化を考えていることが、一例として挙げた総合型地域スポーツクラブの理念や目的から伺える。

地域における総合型地域スポーツクラブの在り方について

- 1) 世代間を越えたコミュニケーションの場
- 2) これまでの競技志向重視型のクラブから楽しみの志向を取り入れたクラブへ
- 3) スポーツを通して、地域貢献
- 4) 文化の見直しと再構築
- 5) 教育的要素を含んだ活動

総合型地域スポーツクラブの「イメージ」として挙げた「青少年団」や「はやし連」、「祭り」という言葉からも分かるように、地域で様々な活動が盛んに行われ、活気に満ちていた時代にあった組織に変わって、今の時代に即した人々の居場所になることが、地域での総合型地域スポーツクラブの在り方として描かれているようである。

まとめ

神奈川県内の総合型地域スポーツクラブのクラブ理念やその目的から、地域における総合型地域スポーツクラブの在り方を探ろうとした。クラブ育成アドバイザー時代にクラブのキーパーソンや中心的なスタッフに対するインタビューの記録や平成17年度と平成18年度にまとめたクラブの事業概要と活動報告書、クラブのオリジナルパンフレットやホームページを参考に研究を進めた。総合型地域スポーツクラブの創設に向けた取組みは、これからの地域にとって、そこに住む人々にとって、また、スポーツが本来持ち合わせている価値の再確認にとっても、意義ある存在であることを改めて感じた。これらは山崎⁴⁾が述べる『プロフェッショナルな人間』、『第三の道』に通ずる。たくさんの課題が山積みになっている総合型地域スポーツクラブであるが、共通の思いを持つ仲間と共に、同じ場所で、活動をしていくことに魅力があるのだろうと思う。

参考文献

- 1) 吉原さちえ・西野仁、総合型地域スポーツクラブの運営の実態－神奈川県内 18 クラブを事例として－、日本レジャー・レクリエーション学会第36回大会号、2006、pp.44-47
- 2) アルフィ・コーン、山本啓・真水康樹訳、競争社会をこえて ノー・コンテストの時代、法政大学出版局、p.133
- 3) ホイジンガ、高橋英夫訳、ホモ・ルーデンス、中公文庫、p.110
- 4) 山崎正和、社交する人間 ホモ・ソシアリビス、中央公論新社、pp.303-305、pp.310-312